

Centimetres

Kodak
LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red White 3/Color Black

繪本梅花氷裂

四

へ 13
1303
4

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

梅文太 四兵衛物語 梅花水裂 下冊

江戸 山東京傳 編



九 齋婦 苦奇疾

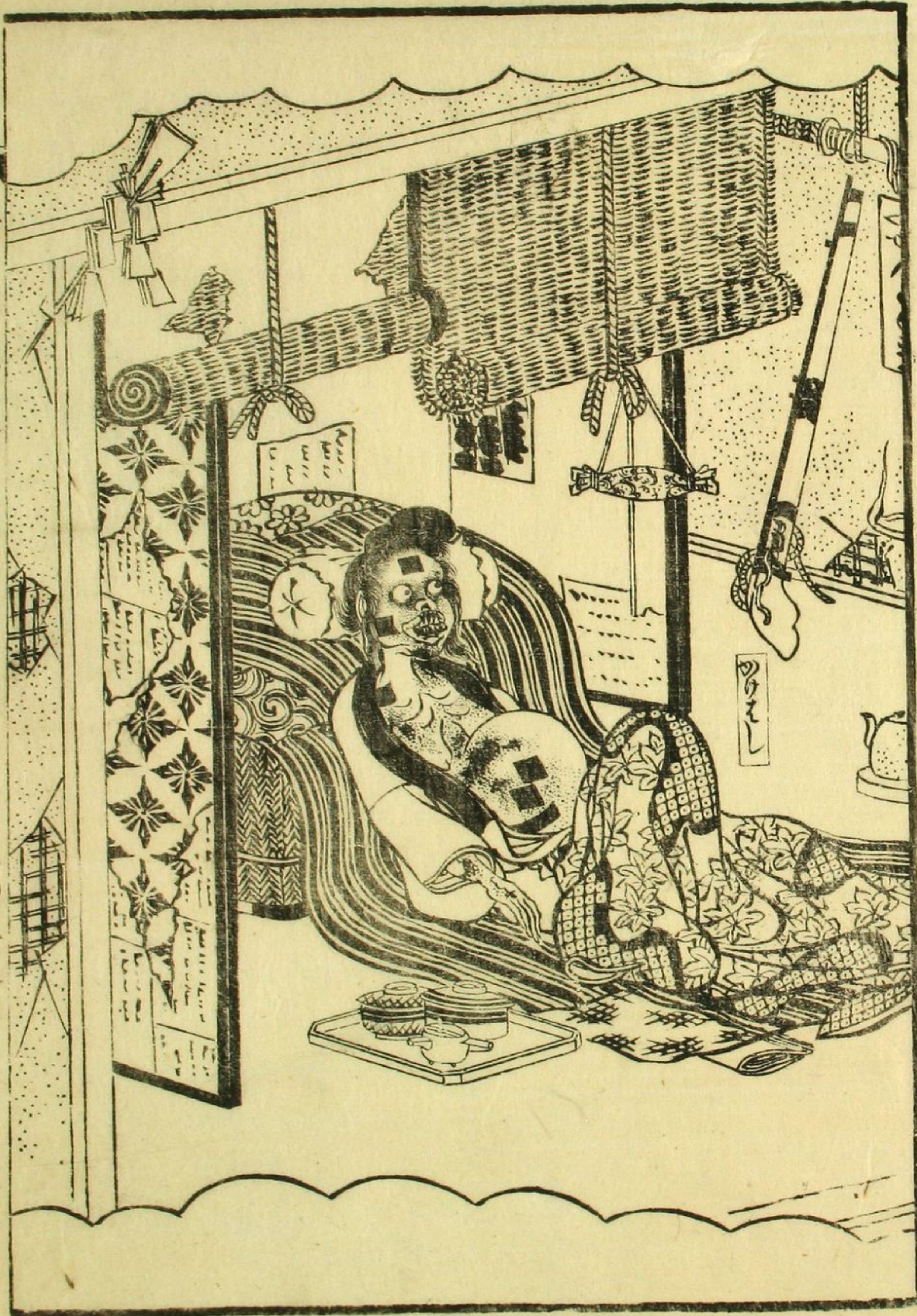
さくらの菘文太の竹符と引路の笛を得て謀をおこなふやとるふち
ありしを述ゆ
一夜棧睡ふつさて大ふおそりしとけりゆき菘文太睡を醒しよび起
あがてさびくさうなきねらふと尋ねし棧大汗を流し吻と息をつき
てひひけるハ夢のうちふあつきの金魚集りて身うちふひつきけり
痛たへかきいとくじりし由急におぼえを声をたてつとつふ菘文太
打同時ありていさあつきの夢もえうりのみたりとのひてまご兩人ねふ
アふつき已ふ翌朝あつくり起出けり棧が身うち夢中ふ金魚
のふつきとおぼえする所ぐられあふりつきてまじく痛あり

とらふらふよりして 養文太あましく膏葉かどつけしめけふあふふ
 痛つらなり又く 面上腫て 瘰癧小毒気を発し 斑駁の奇瘡と
 かりつ小病の床つらぬこれより 明け夜く小苦痛は皮肉たぐれ
 鮮血ながりて 濃江小変り膿水のたぐ 壅壅氷のごとく痒さふ
 志のびど血をぬて 橙ハ指頭小膿水を帯て 腥ことなまをぐ
 齧齧たる一身なる 惡臭鼻をとおしてたぐし 頬額たぐ腫あ
 かり鼻府肉おち 唇府肉て 齒をあぐし 臉もくすりて 眼玉飛し腹
 ハ太鼓を抱 ごとくふ張出あり ぐび手くびい糸のやう小瘰
 むそりて 鳩尾骨あぐりれ 恰も 餓鬼道の衆生のごとし 飢ふたへ
 ごとく小食類ハ少し 咽をとろさぐ 只水をのむこと 日小數并
 おやくのめがとく 苦痛とらぐ 正是深の花が 怨魂の所為と

あふたり 腹大くたり 出て食をたぐることあふらぐ 飢ふたぐ
 懐胎の深の花を 餓死せしめんとあふら 報あふら 殊更顔あふち
 紅小変り 面異相とかり 水を好てのむたぐい 皆是金魚の為体
 げおそらぐさの報とじ 医者むとむとて 病体とるさふ 医者
 のとくその 面赤頂腫と 蝦蟇瘡の病とひ 腹のたぐき 出るを 脹
 満の病とひ 食類とさふふと 不食病とるさふも くれいものたぐひ
 あふらぐ 夏子益ガ 奇疾方あものまごのせと 土佐某ガ 奇病の面ふも
 けいぞるさぐ 一所の 怪疾なり 療治をたぐとと 小術はとひて 茶をま
 一ぎれが せんむぶち 唯あふらぐて ぐらふ守り 居るのさかり 比し
 嚴冬の 時かりふあふら 蠅集りて 膿水をまひ ちどものさふとこれ
 もまぐツの 奇怪なり 病人ハ 苦痛さふい 一倍しあふらぐに なる

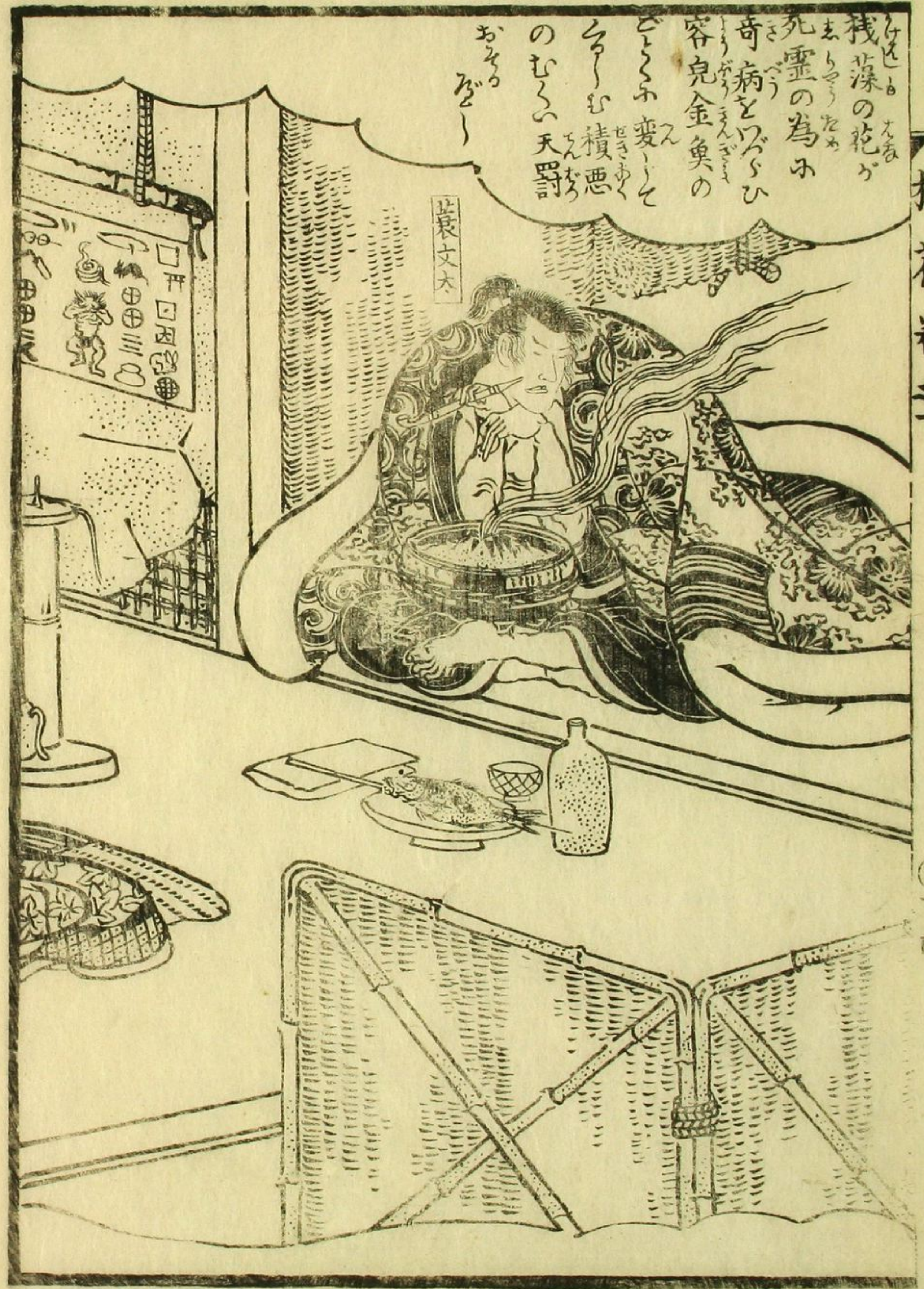
ぐらとかわささげび七轉八倒して才をめぐりてとくはしこけり又ハ時ぐ
 心くろくかりて乳とる黒髪を両手ふつと飛出たる眼はわらけて
 蓑文太坂をことあらし法奸計をなして我を死実の罪ふおしは嬉
 婦小むちおしり足ふかけを踢殺し出生の子までを殺さめたる恨とい
 つどの世ふちとるべさるるく汝あもやぞ夏目をアせんごとと黒目であ
 む面体おそしちたれもいづかむむ或は又くく枕を抱え。とらふ子を
 慰むやうふ。あしくつひひけて。かゝるさめゆいし子よ。ワゴアアガ乳
 母いづくみぞ。山越て里ふと。あはるる声して。子りり歌をうたひて。
 枕をととおとして。あな悲しや。我いと子を何者かうびひおほぞ。子を
 つかせ子とせと。ひいていさあべと泣。あくうととむが笑ひ。ワフふ
 くとと泣い泣。あまの笑ひつ。こゝひつ。あまら。つひあ狂ひつうれてま

ろび伏志がくく正気かー正気ふたしび苦痛ゆゑのことしめて今も
 ねえつらかとろふこと度くなりしがううのひけりいづく苦しむのこを
 い深き恨をまじりて一旦快気させあまらふかどの目おあまらじと
 のひりかたどわくとの年も過春ふらうて全快し常のごとく健ふわうて
 ぬじども面体の変じたると腹のちり出さういあまらじど面上才ちの
 瘡の痕鱗のごとくふあたらね紅のり其終めて更ふ人のゆゑち
 けんむおそしわくもいづかむむおのとも鏡おむくひ二目とえ
 あくこ次女とかりたるを歎きゆつて蓑文太ふアアととらふ人
 もやくひぐろの心よりまじく愛欲の情深くかりて烈火不油取
 そくたつらごしく生来の妬心十倍してやゆむと恨く誓てる
 びよじさて蓑文太めどが全快の体とるていひけり我うて行ん



残花の花が
 去りゆくため
 死霊の為み
 奇病といふは
 容兒金魚の
 ことか
 変じと
 積悪
 のむら天罰
 おそろ
 ぞ

は哀文大



とつひの謀の別儀小ありぞかの竹符とたのさん引路の番とめて
羽州男麻山小のむすかの蛇丸が山寨とらびひかん才ともふやく
とよきのためのとをさへいんとあふかり此謀十が九つ志あつたらん
心定かりぬ日あつらびじてむうひの人をさしこまじの同留主せ
よといひて俄小旅よそをひととの羽州男麻山とじていそだ
だれわいやくかの山小のりて引路の番とひつたる間道をたづね
のむす夜とくけそやうく山寨の前門小のりぬ門を守り小賊とも
何者ぞとこむむむむ蓑文太腰をゆめろとの寨主の武徳とあると
ひそめん味方小参つる者ふいといひて竹符をさし出しければ小賊
ども竹符と合せえて門内小むひ入るがうく待ておきて寨主小
かくと告げりあそ良ありて賊主蛇丸草屋のはちちうゆつた出て對

面と蓑文太の遙の下小あり頭と地小あり入て恭礼をかこちと蛇
丸相とこるやう海へゆくやかり者ぞ何等の業小達しつらとと尋
この蓑文太のりていつと某へ元来筑紫の海賊とて響音の洋武
とやと者ちが近頃かの地小の菊地大友の軍ありそ山中海辺小
いつらすを兵どもの住家とかり我輩かりりひとあることあると
さねがせんさびやくかの地を去て木曾路とさるようひありは偶君の味
方とありあふこととさうけ玉りり麾下小属せんことを願ん為竹
符と引路の番と得て此所小まあるは某才不肖なりとあると願
水練と得て水中と陸のごとくふとさうれぬとひねがやくの君ひやく
憐れとたどむひて寨中小ゆつひむらぐは丸馬の旁とつとつて
つと奉らんといふ蛇丸打因て蓑文太をつとくえり汝相貌の

氏満を亡人とて汝等我ふあそぶどわらうびひらく惠とたはして
後の栄花をさうめしむべしきこふべしきこふははは返答いふ
といひて眼をのらげてありきけり元来此寨中の野伏小賊もい
まべて不義不集りし弱ふそむた強ふあそび唯貪欲の深き者
どもかりしが叢文太がのらりの詞をまことしきまふたのほしくあひて
忽心をひらびし鋒をふせ剣をかきり地上ふひれはて向後君を頭
領とほ奉りて命令ふそむさゆゆとぞ答りしかくそ叢文太ふ
まふ小謀を仕あせて心中ふあひ蛇丸のあそびさうさう財宝を我
物に俄ふ浮雲の財不富日く夜ふ驕をまのめいすあそぶ
こむひけり初棧ハひとりし留主をまのめいす家ふあそびけあやあそぶと叢
文太がむらひの人をまのめいすむらひけりふ風のたよりたふあけむ心のうち

ふあひけり我う又ふらき姿とわらうつとがその身ひとり男麻山とやん
ふ去て我をまのめいすさうさうひはさるあそびあそび財ふも財ふもくそつと
そむたる男やうめのを今更いさうさうなれさるさやびぐくの山の奥
すそも跡をまのめいすひてゆえやいとそきちがひのごとくふらひひそがわ
旅支度とくの羽州をさして立ゆけりあそびあそびの旅人小道をまひり羽
州小いさうと男麻山の麓を尋ねつき遠ふ山とえあそび越くとそびえ
てのむらび道もは人の通りぬ山ちと道をとらびきよとそがわわいさう
せんと思案ふられけりたそ悪熟毒蛇の餌食とわらうとも執着の一念を
りて鬼らも石窟までもたぐひゆきあそびあそびとそげた志をいじて木の
根をたぐひ葛葛ふとつとそ峻道を越足らう血をわがし裾ひきこた
辛どく山深くのむらとゆきぬさそ此日の晴明の天気かりけるが叢文太の

傍ちく召仕ふ小賊どもと志ざる寨外の又をりし上死所不出て酒宴城
 催し蛇丸が捕へおきさる兩人の美女を右左り不居しめあやくとせ大
 盃をひけ小賊等も与てのゆめ盃あふびわづれて全従とも不十分
 小酔大不へ真しけ折も棧の執着ふさ一念を以てつひ此所までのむつこ
 てるふ此体をもて妬の心火となりて胸を焦しあふあれて走来りて叢
 文太をふりてひひけの妾が推量ふたぐどかくえあけ死姿とかりをい
 ころひ借老同穴とわづひ詞をたぐてこの身独り榮耀をなす道
 まどぶよたとくつぐくみかくるもつこまよひでおくづれくあふあふくをり
 たちやとのひて兩人の美女をふりて汝等ハ何奴やと我が夫の傍ちく
 つうゆぞふ不妾どもあふめ汝等ふえくどなる命をささふふひま
 さんふひ志れとのひひ飛つてて兩人の女を引おろし左右の午不兩人の

響つてつうて伏起しつさのまめが兩人の女ハ唯由しあぐと泣さけが叢
 文太の寂前より棧が恨詈詈耳ふも入ど唯酒をのりて打唄て居る
 けが此体をもてわづの刀をとりまじること扱て棧が肩尖を二二寸
 まりとめが呀とさけが声とくも鮮血さとはじりて身うち朱ふそひ
 声うつせてこの我を殺さむといわ叢文太おろわづれいもく殺して
 志まふ奴かりわが我本心を語りさるん冥途の土産ふよく閉じ我汝は
 恋慕心深さやふめてあせいのとぶていつらとめて実ハつゆぐりも愛
 念なり唯浦右衛門がたらの金の鎬藤四郎の刀を奪ひとらん為の
 計かり我偽筆を以て浦右衛門が昏簡とのつらと深の花と心を合
 せ汝を害せんとするらんぞ志ざる皆汝をあらがむ恋路ふ古又しを
 て金と刀を手ふ入んため浦右衛門藻の花等がまじも志りするまふ非



旧鳥養文太
 羽州雄麻山
 の賊主とあり
 棧を斬

梅花卷之下

それと実と忍びしハ汝が愚あつゆゑあわぬが如き人々を恨むとさもや
さげほひひけとが棧とれを同て手疵の痛さも亦忘とさせしあつりつる
罪科ある浦右衛門どの藻の花を失せつる後悔さふたと我を殺
せとも生かす死らり六道四生ふ悪霊とありて仇をむくらでかく
なれうといひて眼をわらげ牙とちりし炎のごとれ息をつたけ有
黒髪さめくとありてそらさぬ小たちのがさるる西人の女の髻とさる
さざとどりあがりと飛わがごと怒狂ふありさぬおそしあつりつる
蓑文太の尻目ふえやりてあざ笑ひ我りつる金と刀をうり人々為小汝
どあざむき又ハ雪女ふお扮して少の銭財をうりひくたむハ畢竟
昔運を失ひてせんさぶちく雞をささふ牛の刀をもちひ雞籠の為小千
金の髻を毀しちるがごとし我ハ元来あつりつる小豆をわつりつる心と

昔はた者ふあつりつる今中々福の一端を得て此山寨の頭領とつる
つとがやとて一國一城のあはじともあつりつる汝をこのうちも我うとつる
そむいぐ一せハ女小生ハ冥加ふあつる世ふありつるあつりつる
我劍の引道すあつ成仏せよといひて又二寸さつりつるあつりつる
て刃とめり倒つ起つらつむたひぐ警をつらつれ二人の女の倒つ
あつりつる目うつめれて息もたえぐあつりつる蓑文太ハ右小刀を持
左小刀をさつりて酒をつがせ一寸さつりつる一口の二寸さつりつる二口の
これ嘉穀ととち笑てあつりつるさつりつるけとがあつりつる
やとおめれさげび七轉八倒苦痛の体をつらつるものともあつりつる
誠是悪鬼羅刹の所行ともいひつるびやくあつりつるつひふ大盃の酒をの
あつりつるや此世のいとなをさつりつるつるといひて棧が首を水もたつる

手と尽しけり己ふとの年もくれ果てあつた冬の年をむくやうく痛
治しけりがちりぐふ発足せんこそいそがしく旅よそをひをととのへり
爰ふまご当国石濱とつふ所小研屋の瑛助といひて刀劍の賣買を
る者あり本年都ふのりところの飯国しけりが壱ふ希むる各刀
と得てつたよれ買人をするといふ噂と兵隊ありふ同の刀の
ゆへを尋ねる最中ちりぬがりと心おひりまが旅立をのぞき瑛助
かひとふつりその噂のあつた刀をえるふまがふかたつた鑄藤四郎の
刀をれれ心中大ふたれふといふもさあぬ体をほまが價をとひ
けり小金五十兩かりといふあぞ我のふゆしてむべけりかたつた他
へえせぬなと約しつてつて妻小梅ふまがの支成せり我のつて父の
物語を同じふかの刀の御主人かひて懇望しあふよりおん館をたて

よりたぬらじ刀をれれ滝次郎の宿志とどげられ後おの刀をて
いぢん家再興のあひがじさふふりて人手小渡をまがさるかりさる
とて價五十兩とらふ金ちりが我身分めて急小とのふべれ手段な
せめて少しい手附金を渡して日とのべおさ滝次郎の跡をまがひ
ゆれ相談して金はとふんとまがかりと吐息してひけしと小梅お
同女のさじ出たりこそおおさねんかの刀のりと盗にゆめちりれ当野の
郡司ふまがし告て瑛助を孔明しむおかのぐり敵のゆくもまがし
且刀も價を出さざりてゆりゆりんとまが心いつとあらびやとつたよ四
兵衛ゆり愚かりこそぬりふのうな我の心つぎりまのあざれども
瑛助ふとの出所とまがし小本曾路めて往來の旅人の手よりゆり
つた賣人の住所姓名をまがむといふまがのて瑛助を孔明せんとして

まが小串の館のちん名を出さぬばやうどさあ時の刀とさうのどとさ
 も唐琴の家再興のちりどじち家再興のちりどさぬば刀と得りさ何
 のかひうわんとく人手小口にて我忠義の道ちど我家の梅の
 衣食を生どる寶木あて大切の物やれども忠義あぬぢしえをく
 梅を質入して手付の金をその人とさふちうとひて又いそふく
 出ゆぬあとも小梅小首とさふけて心のうちふひけりぢし
 大急の難義ゆき金ぐそののちの御主人の為夫の為此身を賣ても
 どののへびぢ折るう懐胎して五月さう産ちとさまてその
 身を質ふりさあべとののぬこらよあふ唯情あまの敵同士と
 たることそれとちあけ語ちぢ義ふつれ夫ぢ即座不離縁の必
 定やうさうさうのちまごうともつひあわのちとせん又二ツの母人さあふ

一さりけと岡むらさで悲しくちぢせん母の夫をぢふゆ
 せん我多ひぢぢぢぢ不孝ぢぢ母の義あらし。さうぢぢぢぢぢ
 まぢぢよとささぢぢ思案ぢぢとて一向涙ぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 由外のさふ初者のささとして古郷をさうぢぢぢ三井寺花の都
 もちくぢぢぢ「順礼の者小報謝してむり」とさふ声のゆとありれ
 ぢぢぢ小梅立出てうぢぢあふ年の頃ぢぢひハ十二才とぢぢぢ
 男の子肩あぢぢぢ古布子のうふ笈摺をぢぢ脛中とまぢぢひ料
 鞋とさぢぢ笠小柄杓と持とて門口ぢぢぢぢぢぢ小梅あぢぢてあぢ
 ぢぢぢ順礼道者のぢぢ手の内まぢぢせんといひて折敷小ぢぢ
 げの米を盛てまへぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ
 いとぢぢぢぢぢぢ小梅つぢぢとぢぢ守り生どつぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

賤しゆきざり男子おとこなる小幼才こごさいの独旅ひとりごさなるびくあつり国くにのわくと
 尋ねまは和泉国わいせんこくとたつあぞそわちりじま妻つまも和泉わいせんもあふ
 りてその住居すまひと詞ことばせりくそひけりふりその国の境さかいの者と
 答こたへけり小梅こうめを問とて胸むねをわかれ若弟わかしやうあつむとそわちり立
 ようてそのふふふと追おひけり順しゆん礼れいをわけてのやうに我
 才さいが独ひとり旅たびを志こころす別べつの儀ぎふゆくと只ただ独ひとりある姉あねふあふん為ため
 の難儀なんぎをいひて尋たづねあり死しゆどもうくつらも所ところふあつてやんさ
 なるを殊こと小姉おとといひけり只ただふりかふ問とのて一度いちども對面たいめんせぬ
 顔かほたふえさうと尋たづねあり便べんと申まをす只ただ名ななるそれゆゑ今いまふた
 つねありいひて若わ此こゝ辺へ小梅こうめの身み四兵衛よしいゑとふ人ひとふつれきふ小梅こうめどのと
 女めづ中ちゆうのちんままとつとひもとつらさふ小梅こうめの昔むかし驚おどろきとて弟あにの

長吉ちやうきちであつりちりじりや也なりじマ我われを姉あねの小梅こうめとていふと
 がすそ志こころす今いまも夫ととがひり來きて栗野あきの十郎じゅうらう左衛門ざゑもんが一子いちことこころ
 敵たつまのくつひと此こゝ子の才さいのうへ小難おんが義ぎのつらへ必定ひつていたり夫
 とそふちり小名おのり告つて憂目うれめふあふさんより名なのぞいそが悲かなし
 めと心こころを志こころすめつとよもしくひけり年としもゆらう才さいを持つて
 ちり道みちをたづね來きつらるるがの殊勝しゆせうさふその姉あねが問とてい
 さぞなうれくちふらめ飛立とびたちやうふあつてさうなふり世よの
 義理ぎり小邊おへ水みづのおとひめをもあつちひさるぬふ此こゝ武藏ぶさうふの堀ほり難なん
 の井いもあつりのをとひりて禁原のりのかくれがあつじの名なもあつれぬち草くさ
 より草くさふ八月はつげつのゆへあつれぬも理ことわりぞ連枝つらなえの縁ゆかりつとておのづ
 めぐりあつて時ときわん野山のやまを越こて万まん一いちおちりて靴くつちり飼食まど

とあふばいふせん命いのちをそめのだぬふ一旦古郷ふるさとに立ちあつて時節ときふしをきつら
 よめめとよそぢがういひあぐさむれが順礼しんれいの涙さじぐとあぐたふ
 火ひの中水みづの底そこまでも尋ねあぐ心こころふ心こころ恋こひしくあふ好あはく人ひとを尋ねあぐぬ
 ばかりすぞの古郷ふるさとにあつて心こころふあぐぞとともありと縁えんあぐべ歎なげふく
 して死ぬぬがまじ息いきのあふあうちの忘わすれどあぐるに好あはく人ひとよきうわが
 唯悲なげしいのうぐくもも独旅ひとりたびとて宿やどあぐぬが或ある人ひとの山やまに卧ふて雪ゆき凍こる時
 もあぐ野のあつて雨あめあぐる時ときもあぐ流ながれとくと渴あせとあぐのた一せん
 二せんふたの情なさけを乞こめてあぐ命いのちをたのみの或ある人ひとの軒下のきにあぐの内うち
 と立ちあぐぬが盗人ぬすびとよ畜生ちくじやうよとあぐさげ小言のまごととあぐあつたうれて
 うち小生ちひなま痴ちいたえとあぐあぐたふことあぐくひあぐ尽つくされぬ好あはく人ひとを
 さある憂目うれめも好あはく人ひとあつてあぐ一念いちねんあつてられまふあぐあぐのび来きるあぐ

